

教育長報告事項資料

一般事務報告

- 1 文部科学省総合教育政策局教育 DX 推進室視察 (9/12) (教育専門監)
- 2 しろいし蔵王高原マラソン (9/15) (生涯学習課長)
- 3 文部科学省行政研修生受入 (9/24～10/11) (教育専門監)
- 4 まちづくり協議会会長・公民館館長・公民館事務長合同会議 (9/30)
(生涯学習課長)
- 5 オーストラリア聖ラファエル校受入 (10/2～10/7) (学校管理課長)
- 6 9月議会の教育委員会関係一般質問 (会期 9/5～27、一般質問 9/10, 11)
(教育部長)
 - (1) 大内卓也議員 (幼保方針、技専校活用)
 - (2) 佐久間順子議員 (障害者支援)

専決事務報告

- 1 事務局職員人事 (学校管理課長)

その他

- 1 全国学力学習状況調査結果の分析概要 (HP掲載) (教育専門監)
- 2 その他

令和6年度 全国学力・学習状況調査結果概要

白石市教育委員会

I 調査の概要

1 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
 - (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
 - (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- (※文部科学省調査目的)

2 調査実施日 令和6年4月18日(木)

3 調査対象 小学校6年生 10校 205人
中学校3年生 5校 216人

4 調査内容

(1) 教科に関する調査(国語、算数・数学)

- ①身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等
- ②知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等に関わる内容

(2) 児童生徒質問調査

- 児童生徒を対象とした、学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

5 その他

本調査結果は、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面です。

II-1 調査結果(令和6年度)

1 小学校第6学年

◇白石市と宮城県・全国との平均正答率

※ 宮城県…仙台市を除く

教科	白石市・平均正答率%	宮城県・平均正答率% (本市と県との比較)	全国・平均正答率%
国語	67	65(+2)	67.7
算数	57	57(±0)	63.4

2 中学校第3学年

◇白石市と宮城県・全国との平均正答率

※ 宮城県…仙台市を除く

教科	白石市・平均正答率%	宮城県・平均正答率% (本市と県との比較)	全国・平均正答率%
国語	55	55(±0)	58.1
数学	48	46(+2)	52.5

Ⅱ－２ 調査結果（経年比較）

□白石市平均値と全国平均値の比較

⇒出題形式の変更により令和元年度からの経年比較

⇒令和２年度の平均値比較は全国学力・学習状況調査が実施されず表示なし



【結果の概要】

- 今年度の全国学力・学習状況調査の結果については、小学校の算数、及び中学校の国語、数学ともに、全国平均には及ばなかったものの、小学校国語においては全国平均とほぼ同等の結果となりました。
- 県の平均と本市平均の比較においては、小学校・中学校合わせた4教科のうち2教科で上回り、残りの2教科では同等の結果であることから、総じて学力は改善の方向が継続している状態と考えます。
- 経年比較においては、小学校及び中学校の国語において微減であったものの、中学校数学においては全国との差を縮めています。
- 小学校では、全国平均を上回る学校が複数校ありました。中学校におきましても、国語・数学において全国平均を上回る学校が複数ありました。このことから、市全体の学力は改善傾向にあると捉えております。
- 以上のことから、全体的に学力は改善傾向が継続していると考えます。一方、全国平均との差を踏まえると、小学校算数、中学校数学については課題がある結果と言えます。

Ⅲ 各教科及び質問調査の結果と考察

小学校国語

学習指導要領の内容「思考力・判断力・表現力等」の「読むこと」において、人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることができるかどうかを問う記述式の設定問において全国平均を上回りました。その理由の一つに、A Iドリルの「読むこと」内容の問題が充実し、その積極的な活用が成果につながったと考えます。また、「知識及び技能」の「情報の扱い方に関する事項」の設定問も全国平均を上回りました。情報の扱い方に関する事項は課題でしたが、本市教育アドバイザーによる学習指導の改善と工夫に関する研修を踏まえ、様々な図示の方法に触れるとともに、児童がそれぞれの方法で考えを明確にしたり思考をまとめたりすることを理解し、それらを使うことができるような授業を展開してきたことが成果の要因の一つと考えます。

一方、評価の観点「思考・判断・表現」に関する複数の設問の中で、目的や意図に応じて、事実と感想、意見とを区別して書くなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができるかどうかをみる記述式の設定問（図1）が課題となる結果でした。正答は三つの条件が必要とされていますが、そのうち、条件①「『たてわり遊び』のよさについて自分の考えを書いている」ことを

【高山さんの文章】

※内容を抑え「たてわり遊び」

わたしたちの学校には、1年生から5年生までのメンバーが、同じはんで活動する「たてわりはん」の取り組みがあります。「運動会」や「たてわり遊び」を通じて、ちがひ学年の人とも仲良くなります。

運動会は、「たてわりはん」ごとに色、着、旗の色を決め、3対3で行われます。上級生が下級生にわたしの指導を教えるので、下級生も楽しむように、さよふさの作戦を考えたりします。「みんなてつなびまして楽しい」という2年生が、「下級生はいいよにたてわりはんで楽しんでいる」という3年生がいます。このように、「運動会」のよさところは、みんなの心が一つになることが大切だと思います。

【高山さんの取材メモ】

「たてわり遊び」について
6年生がふりましていること
○遊びのルールを年次別で決める
○ルールを守り遊ぶ
○学年ごとに、上級生は遠くからボールを上げる
下級生に聞いたこと
○1年生 お兄さんやお姉さんと遊べて楽しかった
○3年生 好きな遊びや新しい友達が増えた
○4年生 みんなが楽しそうだった

（図1） 目的や意図に応じて、事実と感想、意見とを区別して書くなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができるかどうかをみる設問

を満たしていない解答が多くありました。話題に対して自分の考えをもてず、事実と感想、意見とを明確に区別せずに事実を自分の考えのように書いてしまった児童が多かったものと考えられます。取り上げた事実が自分の意見を裏付けするものになっているか、児童同士で書いた文章を読み合い、確かめ合う場面を設定するなどして相手意識をもたせ、自分の考えが相手に伝わるように文章を推敲する活動を充実させていくことで改善を図ります。

「知識・技能」では、学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使うことができるかどうかを問う設問と、文の中における主語と述語との関係を捉えることができるかどうかをみる選択式の設定問で全国平均を下回りました。漢字で下回った「競技」を正しく書く設問では、「競」「技」のどちらかしか書けていない誤答に加え、「競」の「立」の部分に「土」「口」の部分に「日」と解答しているもの、また「技」と同じへんやつくりをもつ「投」や「枝」と解答している児童が見られました。従来のノートでの練習内容を工夫するとともに、覚えた漢字を忘れるであろう時期に問題を再度提示するA Iドリルを更に効果的に活用することで、正しい漢字の書き方を覚えるとともに、語感や言葉の使い方の感覚を意識し語彙を適切に使う学習活動を進めていきます。主語と述語との関係については日常的に主語・述語が何かを意識して文章を読んだり書いたりすることが重要です。その際、主語の表し方は様々あることや、主語と述語が離れて表されている場合があることに留意し、低学年から繰り返し指導することで改善を図ります。

質問調査において「国語の学習が好きですか」「授業の内容はよくわかりますか」の質問に対し、肯定的な回答は全国平均を大きく上回っています。この結果（学習意欲）が学力の継続的な向上及び定着に結び付いていると考えますので、今後も意欲的に学習に取り組む授業づくりを推進し、更なる学力の向上に努めていきます。

「思考力・判断力・表現力等」の「話すこと・聞くこと」に関する設問では、全国平均を上回る結果となりました。この設問は、「必要に応じて質問しながら話の内容を捉えること」や「資料を用いて、自分の考えが分かりやすく伝わるように話すこと」ができるかどうか問われており、その力が身に付いていると言えます。これは、授業での話し合う場面において、目的や話題を意識させ、話し合いがどのような段階にあるのかを捉えながら話したり聞いたりするような学習活動を行うとともに、A Iドリルを活用し復習問題として学びを確かめる取組を行っていることが成果の要因の一つと考えます。

また、平均正答率が全国で最も低かったのは、「文章と図とを結び付け、その関係を踏まえて内容を解釈することができる」ことを問う設問でした。問題の概要は「さまざまな葉の形が示された図を踏まえ、文章を読んだ上で、葉の役割を適切に説明したものを4つの選択肢から選ぶ」ものでしたが、本市は全国平均正答率を大きく上回りました。図表や写真などを含む説明的な文章を読む際に、実生活の中にあるものを教材として取り上げ、文脈と図表を関連付けながら内容理解を図る授業を協働的に取り組んだ結果であると考えます。

(図1)

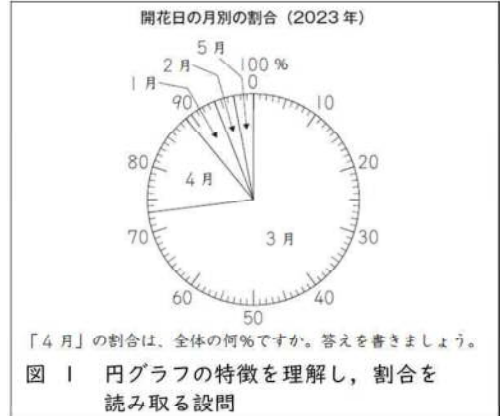
一方、「知識及び技能」の「言葉の特徴や使い方にに関する事項」については課題が見られました。特に、「表現の技法についての理解」や「文脈に即して漢字を正しく書く」ことについては、全国平均を下回り、知識が十分に定着していないことが認められます。具体的には、短歌に用いられている表現の技法を説明したものと適切なものを選ぶ設問(図1)において、選択肢として「擬人法、直喩、倒置法、体言止め」が提示されていましたが、正答である「体言止め」を選択した生徒は約42%でした。これは、それぞれの表現技法について、言葉そのものは知っている反面、意味や効果等についての理解が十分ではない結果であると考えます。今後は、表現が工夫されている文章や詩歌を取り上げ、表現の技法に着目し、その名称を確かめた上で、効果について考えたり自分の表現に生かしたりするなど、知識と活用場面が結びつくように指導していきます。また、文脈に即して漢字を正しく書くことができるかを見る設問(「みちたりた」)では、全国平均正答率と比べて「満」と「足」の両方を正しく解答できていない生徒の割合が高い結果となりました。授業の中で、字体、字形、音訓、意味や用法について確認し、文脈に即して漢字を読んだり書いたりすることができるよう指導するとともに、更にA Iドリル等を活用した知識の定着を図る学習活動を工夫し実践していきます。

全体として、「思考・判断・表現等」の力は比較的身に付いており、「知識・技能」の定着に課題があるという結果となりました。今後は、生徒が自ら課題を設定し、ICT等の積極的活用や協働的な学びを通して思考を深め、疑問やより知りたいことをもつ主体性のある授業を展開し、知識・技能の定着が一層図れるような学習を進めていきます。

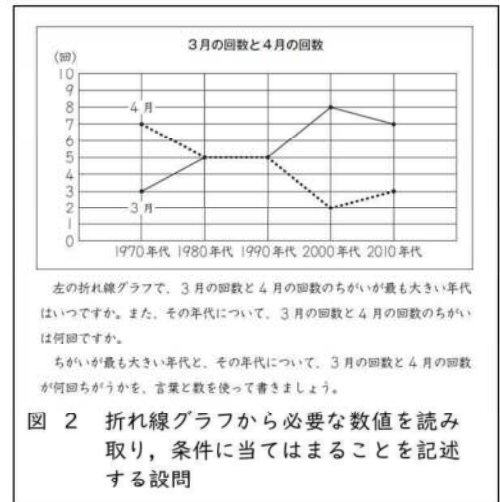
小学校算数

今年度の調査で、知識・技能の観点から出題された問題は9問ありました。その中で、問題場面から数量の関係を捉えて□を用いた式に表すことや、直方体の見取図を理解して描くことなど、知識・技能の定着が見られました。

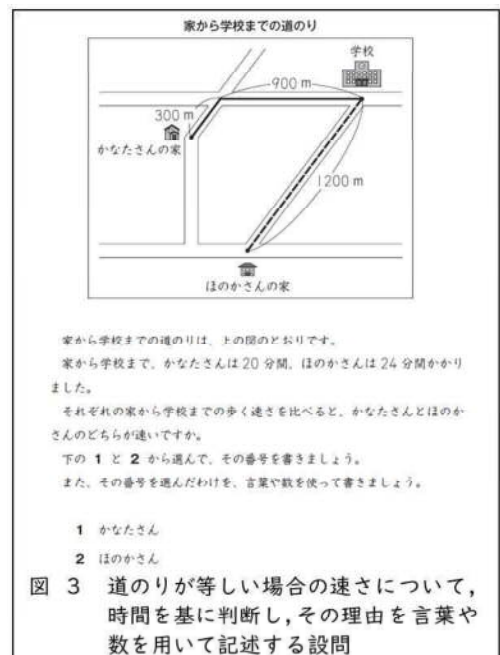
円グラフの特徴を理解し、割合を読み取る設問（図1）では、十分に理解している結果でした。これは各学校でA Iドリル等を活用した学習が行われ、知識・技能が着実に定着してきた成果だと捉えています。また、「データの活用」領域については、児童の興味・関心や問題意識に基づいて、必要なデータを収集し、分類整理したり、表や適切なグラフに表したりして、統計的に問題を解決できるような学習が大切です。今後も日常生活との関連を図りながら、より充実させていきます。



一方、グラフから「ちがいが最も大きい年代」と「回数がちがいが」について読み取り、言葉や数を用いて記述する設問（図2）で課題が見られました。この設問に対する本市の正答率は約31%で、全国平均を下回りました。解答状況を見ると、グラフから読み取らなければならない「年代」については約68%の児童が正しく記述していたにも関わらず、「回数がちがいは6回」であることを記述していない誤答が目立ちました。中には、3月の回数を2回、4月の回数を8回と読み違えた解答もあることから、特に二次元のグラフを適切に捉え表現する力が課題の一つです。普段の学習の中で丁寧に取扱い、分類整理や判断する力を高めていきます。



また、今年度の調査で最も正答率が低かったのは、道のりが等しい場合の速さについて、時間を基に判断し、その理由を言葉や数を用いて記述する設問（図3）で、本市の正答率は約22%でした。設問で問われた速い人物を正しく判断できた児童は約75%もありましたが、選んだ理由が正答の条件に満たない記述が多くみられました。誤答では、二人が歩いた道のりが等しいことには触れていても、時間を基に判断したことについて書き表されていないものが多く、この傾向は算数の正答率が比較的高い児童にもみられました。これらの結果から授業全体を見直していく必要があります。今後は、学習の中で自分の考えを表現させる場合、判断の基となった事柄について触れられているかどうか丁寧に見取りながら学びを進めるなど活動を充実させていきます。



中学校数学

知識・技能の観点では、「図形」領域の図形の移動の設問や「関数」領域の1次関数に関する複数の設問で、正答率が全国平均と同程度でした。また、思考・判断・表現の観点の記述式の設問では、「数と式」領域の事柄が成り立つ理由を説明する設問や「関数」領域の問題解決の方法を数学的に説明する設問において、正答率が全国平均と同程度でした。先に示した知識・技能の観点の設問に加え、思考・判断・表現の観点の設問においても、複数の設問で正答率が全国平均と同程度となっています。一昨年度から導入しているA Iドリルを活用した知識・技能の定着を図る取組や小中連携で取り組んだ思考力・判断力・表現力等の育成を重視した授業改善が一因と考えます。

一方で、「図形」領域の筋道を立てて考え証明する設問（図1）は、正答率が全国平均を下回りました。図形の性質を基に根拠を明らかにしながら、筋道を立てて証明することに課題が見られます。改善に向けた証明の学習では、根拠となる図形の性質や仮定、結論などを整理しながら証明の方針を立てることを大切に、それに基づいて証明する活動を繰り返しながら、各学年を通して段階的に指導していきます。

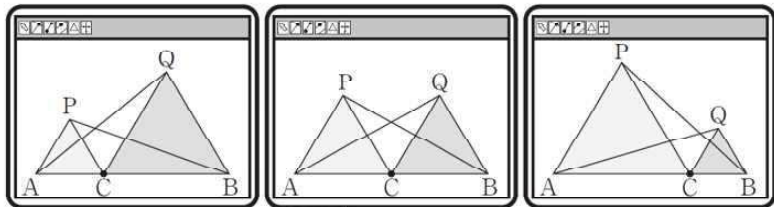
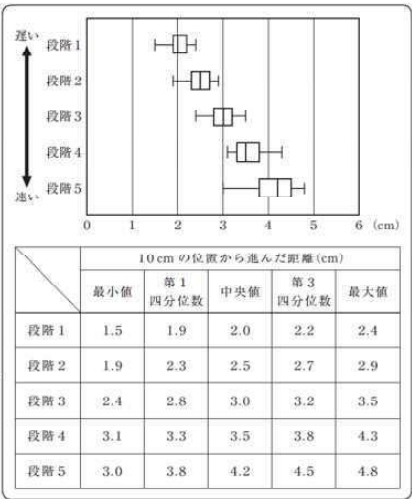


図1（上）点Cを線分AB上にとり、線分ABについて同じ側に正三角形PAQとQCBをつくるとき、 $AQ=PB$ であることを、シミュレーションソフトを用いて予想するとともに、三角形の合同を基にして証明する。

図2（右）車型ロボットについて「速さが段階1から段階5まで、だんだん速くなるにつれて、10cmの位置から進んだ距離が長くなる傾向にある」と主張することができる理由を、5つの箱ひげ図を比較して説明する。



また、「データの活用」領域では、複数の設問で、正答率が全国平均を下回りました。複数の集団のデータの分布の傾向について、基本的な知識を用いて比較し読み取ったり、判断の理由を数学的な表現を用いて説明したりすること（図2）に課題が見られます。複数の集団のデータの分布に着目し、その傾向を比較して読み取る活動を通して、代表値や四分位範囲などの必要性や意味について理解を深めるとともに、それらを根拠に判断の理由を説明する活動を重視した授業改善を進めていきます。

全体の正答率は、全国平均との乖離が縮小しており改善傾向にあります。生徒が目的意識をもって数学的に問題発見・解決する過程を通して、基礎的・基本的な知識・技能を確実に身に付け、思考力・判断力・表現力等を伸ばすことができる授業改善を引き続き進めていく必要があります。授業改善では、学習した内容を活用して問題解決することで、活用方法・場面と結び付いた知識・技能として身に付けられるようにするとともに、いろいろな場面で知識・技能を活用しながら思考・判断・表現できる力の育成を図っていきます。その際、1人1台端末で利用できるA Iドリルに加え、デジタルコンテンツや協働学習支援ソフト等を更に活用することで、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図り、主体的・対話的で深い学びの実現を一層進めていきます。

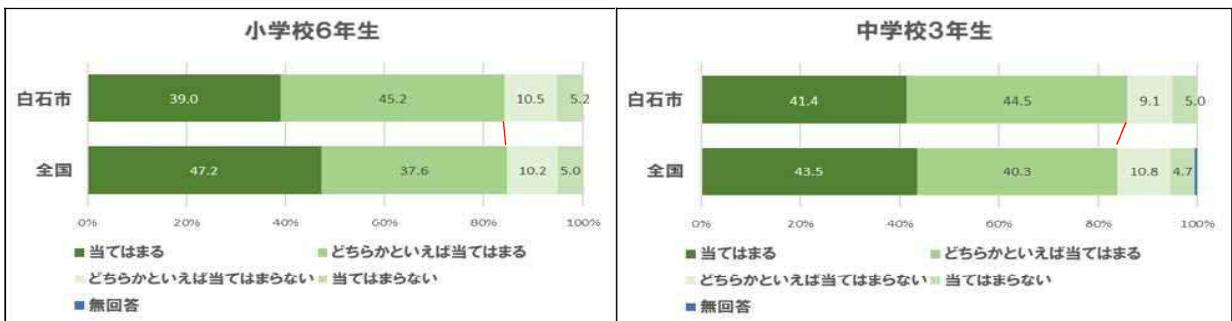
児童生徒質問調査結果概要

本市で重点としています「自己有用感」「意欲」「電子メディア（生活習慣）」の項目を抽出して取り上げております。

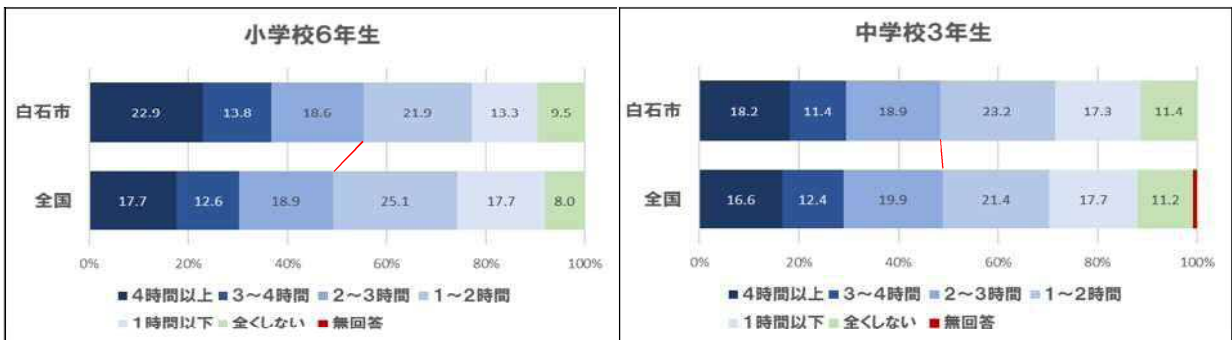
■将来の夢や希望を持っていますか



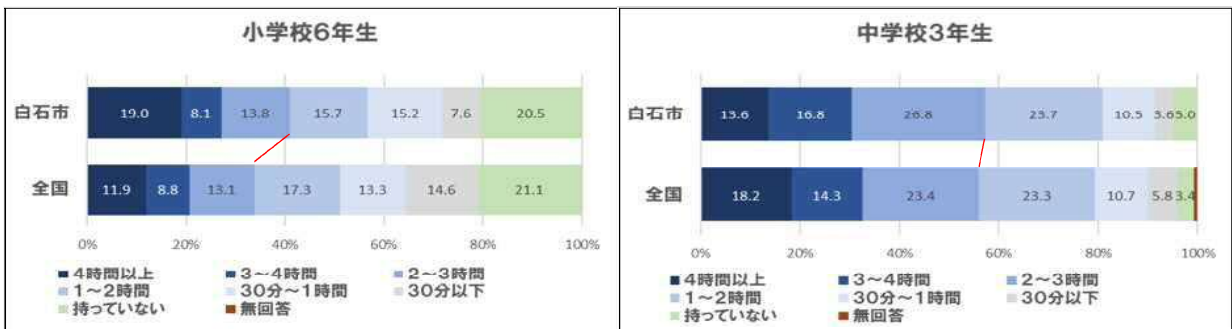
■学校は楽しいですか



■普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、テレビゲーム（コンピュータゲーム、携帯式のゲーム、携帯電話やスマートフォンを使ったゲームも含む）をしますか



■普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、携帯電話やスマートフォンでSNSや動画視聴などをしますか（携帯電話やスマートフォンを使って学習する時間やゲームをする時間は除く）



質問調査では、児童生徒の学習意欲や規範意識・自己有用感、生活・学習習慣などに関する学習状況調査も実施されています。本市が重視している内容である「自己有用感」等に関わる意識調査の結果として、「将来の夢を持っている」「学校に行くのは楽しい」という質問に対する肯定的な回答は、小学校は全国平均と同程度、中学校は全国平均を上回っています（前出グラフ参照）。経年比較でも良い傾向は継続しており、「魅力ある行きたくなる学校づくり」を柱とした各学校での取組が成果につながった要因の一つと考えます。このことから、本市の児童生徒の学校生活等に対する充実感や満足感は良好であることがうかがえました。



また、学習時間でもICTを活用した授業改善を進めています。家庭でもその利活用を推進しています。「学校の授業時間以外にICT機器を勉強のために使っている」の質問に対し、1時間以上使っていると回答した児童生徒の割合は全国平均と比較すると、小学校・中学校ともに約10ポイント上回っています。このことは本市が導入しているAIドリルを積極的に活用している状況にあり、児童生徒に定着していることが要因の一つと考えます。

課題として挙げられるのが、特に生活習慣のゲームやSNS等に費やす時間に関する項目です。中学校は全国や県とほぼ同様の数値、傾向にありますが、小学校は全国と比較すると課題が認められます。また、平日にゲームをする時間が2時間以上と回答した割合は、小学校は約55%、中学校は約49%の結果で、経年比較でもその数値は増加傾向にあります。併せて、SNSや動画視聴の時間が2時間以上と回答した小学校は約41%、中学校は約57%であり、大きな課題の一つと捉えています。ゲームとSNSや動画視聴それぞれが2時間以上（計4時間以上）時間を費やす児童生徒も多数認められました。

【本市の児童生徒の平日のゲームの時間と学力調査結果の関係】

■ 小学校 6 年生	選 択 肢		児童数の 割合(%)	平均正答率(%)	
				国語 (14問)	算数 (16問)
1	4時間以上		23.3	59.1	43.6
2	3時間以上、4時間より少ない		13.4	62.9	53.7
3	2時間以上、3時間より少ない		18.8	64.3	60.7
4	1時間以上、2時間より少ない		21.3	73.8	66.4
5	1時間より少ない		13.9	76.5	60.9
6	全くしない		9.4	71.8	59.9
合計			100.0	市平均 67	市平均 57
■ 中学校 3 年生	選 択 肢		生徒数の 割合(%)	平均正答率(%)	
				国語 (15問)	数学 (16問)
1	4時間以上		17.4	38.9	30.7
2	3時間以上、4時間より少ない		10.6	47.6	40.3
3	2時間以上、3時間より少ない		18.4	54.7	49.2
4	1時間以上、2時間より少ない		24.2	60.1	54.8
5	1時間より少ない		17.4	61.9	58.0
6	全くしない		12.1	66.4	56.0
合計			100.0	市平均 55	市平均 48

上の表は本市のゲームの時間の結果と平均正答率の関係を表したものです。この表の内容からゲームの時間と学力とは関連性が認められます。小学校・中学校ともに使用時間が多ければ多いほど正答率が低くなっています。また、2時間以上の使用を境に市平均正答率より低い状態にあることも特徴として読み取れます。この傾向は、スマートフォン等の使用でのSNSや動画視聴でも同様の結果として表れています。

電子メディアを使用する時間やルールを自分で決定し調整する力は、学力面や健康面に大きな影響を及ぼしていると考えられますので、家庭との連携を図りつつ、その改善への取組を進めていきます。



IV 調査結果を踏まえて（今後の取組）

市学力向上グランドデザインの推進

- 改善傾向の要因として、市学力向上推進事業のロードマップとなる「学力向上グランドデザイン」を踏まえた確実な取組、及びR(リサーチ)－PDCAサイクルの定着が学力向上傾向の継続につながったと考えます。この取組を確実に継続・実施していきます。
- 結果の分析や考察について、白石市学力向上推進委員会や校長会等で共有し、課題改善すべき点を確実に進めていきます。また、各学校の実態、課題を確認し合い、学校と教育委員会で協働的に課題に即した対応、支援を展開していきます。



学習指導の充実・授業改善

- 令和2年度（中学校は令和3年度）より完全実施となった学習指導要領を踏まえた授業を一層展開し、新学習指導要領が求める資質・能力の育成を図っていきます。特に、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実による主体的・対話的で深い学びの実現に向け、「これまでの授業からの転換」を視点とした授業改善を進めていきます。
- 調査結果に基づき、各校において学習指導の充実・授業改善策を作成し実践に取り組みます。12月に行う2回目の市学力調査結果から改善策等の成果と課題を検証し、必要に応じて更なる修正や改善を行いながら、学力向上を図っていきます。
- 「個別最適な学び」「協働的な学び」においては、5月に実施した市学力調査結果も活用し、児童生徒の伸びやつまづきを適切に把握し、実態に応じた指導・支援を実施していきます。
- 主体的に学ぶ力を身に付けるために、児童生徒が自らの学習の状況を把握し、自己調整しながら学習活動や学習課題に取り組む機会を大切にしていきます。その際、ICTを活用した学びを展開していくとともに、授業でのAIドリルの有効かつ積極的活用を一層図っていきます。



生活習慣の改善

- 小中学校における1日2時間以上のゲーム使用や、2時間以上のSNS・動画視聴の割合は約50%前後の結果となっており、学力面や健康面に大きな影響を及ぼす一要因と考えられます。今後は、まず、児童生徒にゲーム等の使用時間の現状を知らせ、その上で、これまでも実践している児童生徒自らが、何が問題で、それはなぜか、そのために自分たちはどう行動していくことが大事なのか…という自覚と実践力を高める活動を今後も工夫・推進していきます。併せて、保護者の協力を仰ぎながら家庭での使い方の約束を含め、自己を管理する力を向上させることで、課題改善を図っていきます。

学校と家庭の連携強化

- 学力向上を進めていくためには、学校だけではなく家庭学習の充実も欠かせません。家庭における学習計画（時間や場所）を立て、学習内容を選択し、自己を調整しながら家庭での学習に取り組むことが大切です。本市では家庭での学習時間が全国と比較し少ない傾向が認められます。家庭での学習・習慣化に向けた取組を保護者の皆様の御理解と御協力をもとに展開していきます。